

に精神的圧迫によるもの、ソ連の不法な行為に対する反感が強かったのではないだろうか。記憶は一生、記録は末代までというが、収容所から出したはがきが四通、今手元にあるがソ連から出したこのはがきは末代までの証となろう。

終わりに、心温まる思い出として、ダモイが決定したとき、コルホーズに行く途中に一軒の家があつて、顔見知りの老婆と娘に、日本に帰ることを告げに立ち寄った。老婆と娘は「ヤポンスキー、トウキョウダモイ、ハラシヨウ」日本に帰るのか、よかつたね、と言つて手を差し伸べ、目には涙さえ浮かべていた。そして別れ際に一切れのパンをくれて「ドスベダーニャ」さようなら、と言つてくれたこと。国は異なり言葉は違つても、人の情は変わらないものだと思つづく感じだ。今ごろ、老婆と娘はどこにどうしているのか、健在ならもう一度会つてみたい。

シベリア（外蒙）抑留の記

和歌山県 前澤 勇

八月十六日、我々は中ソ国境近くで、八路軍討伐に熱河省編成の直轄隊の無線要員として出動していた。夜になって通信用の無線機で東京放送を聞いたところ「日本は米英の無条件降伏の申し出に対し、受け入れの態勢にある」とだけ聞き取れたが、またどこかで敵国が周波数を盗んでデマ放送をしていると心にもとめなかつたが、夜中過ぎて省公署の討伐隊本部から「停戦協定が成立したからすぐに引き揚げてこい」と有線電話が入った。

停戦協定ならそうアワを食つて行動することもなからうと、それでも各中隊に引き揚げ命令を出し、私らの大隊本部員は二台のトラックに乗つて省の所在地、承德に向け出発した。途中中国側ではすでにソ蒙軍の進駐を予測していたのか、道路は戦車壕で寸断され、

橋という橋はすべて落とされていたので、トラックの通れる程度に道や橋を直して走ったので、一日で着くところを三日二晩かかった。

ようやく承德に着くと市内はゴッタ返していた。省公署前庭では、書類を持ち出し山積みにして火を放ち、黒煙がもうもうと上がっていた。「ソ蒙軍が進駐してくるから無線放送機は破壊せずにそのまま引き渡すように」との命令が出たが、討伐隊員として出動はしていたものの、送信所の責任者であったので、せめて使用中の周波数は知られたくないと思い、発信用のコイルをバラバラにした。

そして、その夜は送信所の宿舎で寝たが、翌朝ソ蒙軍が侵攻してくるから在郷軍人は武装せよと命令があり、戦闘の準備をしていたところ、日本は米英ソに對し無条件降伏をしたのだから武器を捨てて投降せよと次の命令がきた。

私のいた送信所の宿舎は南営子にあった関係で、南営子周辺の日系人全員が官吏会館に集合した。そこへ離宮の中にあつた日本軍部隊に移るよう連絡がきて、

お前は単身（妻が二人目の出産で日本に帰っていた）だから婦女子の世話をするようにと言いつかり、六台のトラックに分乗させ、私は先頭のトラックの荷台に立ってしばらく走ったところで、ソ蒙軍がすでに侵攻していて停車させられ、拳銃と日本刀のほかに時計等の金目のものを全員からむしり取り、ようやく解放されたと思ったが、離宮に行くはずのところ河原に連れたいかれ、一晩河原で寝かされる羽目となった。

だれ一人ロシア語も蒙古語も話せないのだから始末が悪い。やむなく河原で寝る準備中、前方の岡の上から機関銃の一斉射撃を受け、一団はバラバラになって逃げたが、だれかが大声で「我々を撃っているのではないから、もとの場所に戻れ」と叫んでいた。

それでも、そのどさくさで数人が逃げた先で殺されたという。その晩は河原で婦女子とともに寝て翌朝通訳を連れた蒙古軍人が来て、皆いる離宮に合流することができた。

私はそのまま婦女子の世話係をしていたが、二、三日して警察官全員が監獄に入れられ、一か月くらい獄

中生活が続いた。毎日何回となく所持品検査があり、現金はもとより時計、貴金属、万年筆等の金目のものは根こそぎ奪い取られた。

そして離宮にいた婦女子と十六歳未満六十歳以上の男はトラックで平泉に移送された。

承德―平泉間の鉄道は爆破されて普通。その後一般邦人の男子と警察官の監獄組は、徒歩で平泉の駅まで歩かされ、五人に一人の割で軽機関銃を持ったソ蒙兵に護送され、四日三晩歩かされたので多少荷物を持っていた人たちも、一個捨て二個捨てたりしてほとんど人は着のみ着のままとなっていた。その平泉の駅から無蓋貨車に乗せられた。

ソ蒙軍のうその話か流言もあつたのかわからないが、錦県から大連經由で日本へ、錦県に着けば奉吉線で朝鮮經由で日本へ、奉天に着けば新京から吉林を通つて朝鮮に入るのだといい、新京を出ればハルビンからだ、と樂觀的な解釈ばかりしていたが、さてハルビンから有蓋貨車に移され北に向かって走りだしてから「おい皆、覚悟をしる我々はソ連に送られるんだぞ」

といよいよ覚悟を決めざるを得なかった。このときまで何回となく我々民間人を捕虜にするのは国際法上違法ではないかと主張してきたが、ソ連側では日本の男性は十六歳以上、六十歳未満はすべて軍籍があるのだからと聞き入れなかった。そして満州領を過ぎ、いよいよソ連領入りとなりシベリア鉄道を一路西へ向かい走り出したが、軍用列車や普通列車が来るたびにとめられて、手持ちの米や大豆をバイカル湖の水で洗って炊飯し、一駅か二駅走つては待たされるので、平泉を出てからチタの駅に着くのにか月近くかかっていた。

チタからは、大型トラックに乗せられ途中一泊して翌日ウランバートルの手前四、五キロのところにある元ドイツ軍捕虜の収容所だったというラーゲル（収容所）に將校団、兵士団、民団に分けて入れられた。移送途中列車の都合でほかの兵団と合流したので千人近くいたように思う。そして二日目ラーゲルに隣接して五百メートル×三百メートルくらいある広大な缶詰工場（実は屠殺工場）で就労するよう命じられた。

まず溶接工、木工夫、かじ工、電工、運転手、官舎衛生夫等二十人を要求してきた。

民団側は、もうここまで来てしまったのだから頑張ってもだめだから、技術者は技術的な仕事をした方がよいのではないかと意見が出て、二十人余り技術的な仕事をすることになった。一方軍人側は、あくまで戦争が終わったのだから就労はしないと頑張ったが、翌日通訳を連れて蒙古兵が来ていや応なしに銃剣を突きつけられ軍人と技術者以外の民団の人は、工場汚物廃液処理場建設の土方として河原に追いやられた。我々は電工の職場に配され、ソ連人側の技術長頭に五人の電工と日本人側六人とで働き始めた。

日本人捕虜の就業時間は大体九時間くらいの強制労働をさせられ、食糧は手元に届く前に途中で搾取されるので不足がちになるのが常で、こんなときのために食い伸ばしに残しておいても、まだあるからと支給されない。それで、食糧がないから働けないと「スト」をやる。

すると隊長が監獄入りになって三代隊長が変わっ

た。六か月くらいしたころから工場で屠殺したヤギや牛馬の頭、それに地下室に保存していたキャベツ等の野菜が支給されるようになり、千人近い捕虜がいて一人も栄養失調者も出なかったことは他の収容所にくらべてまことに幸いであった。それでもトラブルはないわけでもなかった。腸チフス等の伝染病がどこかの収容所で発生すると、工場内には入れず、整地に出されたり、他の部隊の応援に行かされたり、材木の河原からの引き揚げに回されたりしたことも四、五日はあった。

犠牲者というと腸チフスと凍傷で入院した、二人が死亡しただけで、他の人はそろって引き揚げられたのは、幸いというほかはないと思う。

よかったことといえば、工場就業者中、責任者扱いとなっていた日本人十数人はソ連人や蒙古人の工具と一緒に昼食を食堂でとてきたことと、各職場でノルマー〇〇%以上になった者には給料が支給された。私で八十〜九十ルーブルであった。

私は一年くらい経過したとき、肋膜炎になりウラン

パートルの捕虜専用病院に送られ一か月ほど入院したことがあった。その病院の裏の岡の上に墓地があり、多くの捕虜の土饅頭があった。

夏場は少し穴を掘って埋葬できたが、冬は死体に雪を集めて覆ってやるだけだと言っていた。死体は裸にして大腿部にロシア語で名前を書き、冬は丸太のように大八車に乗せて岡に置いてくるだけで、読経も手を合やすことすら許されなかつたらしい。私は幸いに、元の工場から連絡があつたので缶詰工場に帰ることができた。ちなみに私の就労内容をいうと、電工で電灯（照明灯）の取り付けと配線、電動機の配線と接続（最大七十五馬力で三十五台くらい）変電室の配線と配電盤の配線、電話交換台の接続、そして高圧送電線の架線であつた。

このようなことで工場に到着してから工場を離れるまでその期間ちょうど二年で、私たち職場の責任者十数人くらいだけ仕事の引継ぎのため一日だけ残務整理して、そこを去つた。

そして、送られてきたときとは逆にチタへはトラッ

クで、それからは貨車でシベリア鉄道を一路走ってナホトカに……。

ナホトカでは第一、第二、第三分所を経て、日本からの迎への船で函館港に引き揚げた。

シベリア抑留

神奈川県 山口 利一

戦い敗れ関東軍に属した私たちは、やむを得ずソ連軍の捕虜となり、酷寒のシベリアに拉致、飢えと寒さと強制労働を強いられ、四年間屈辱の抑留生活を送つた。この間万余の戦友が異国の土と化した。

満州から貨物列車に乗せられ、国境を流れる黒龍江を船で渡り、再び貨物列車に乗せられ一か月余りの旅の果て、着いたところはウランウデという町であつた。バイカル湖にほど近く、モンゴル人の多いところであつた。広々とした原野にポツンと建つ収容所らしいところに入れられた。周囲を鉄条網と高い板塀で囲み、